



心の時代



「やる前から、あきらめるな」と言ってもなかなか生徒が付いてこないことをもどかしく思うことがあります。そんな時は「くりかえし」「できるまで」「わかるまで」を地で行くしかありません。

新高校三年生の中に英頻緑のイディオム編、書き換えを見て「覚えられる気がしない」「絶対無理、無理」という発言があちらこちらからでした。「エブリディコースになるぞ、月謝も変わるぞ」と脅してもどこ吹く風でした。鉄人も何度も試みましたが「彼らは復習をしないから、すぐ忘れてしまう」という声も聞かれました。春期講習では授業予定を組み直し、彼らにとにかくイディオム、書き換えを言えて書けることを目標としました。高校一年で本来なら終えていなければならない英頻の緑ですが高校三年の春になっても終了していないという非常事態にやらざるを得ないと感じて授業をすることにしました。もちろん、緑、その次の青、そして仕上げの赤の英頻に進んでいる者もいます。

以前合格していた諸君にも参加を求めました。やったはずの内容も全員参加してやり直しをしてもらいました。しかし全問正解者はいませんでした。やらないと忘れてしまいます。忘れるのは人の常ですからそれを責めるつもりはありません。繰り返して行けばいいだけです。

体に染みつくまでやる、繰り返すしかないのです。解説をしながら声に出して言えるまで繰り返した後、書いてもらいました。前日行ったところを必ず反復しページを進めました。そして解説が最終ページに差し掛かり、再試験が始まりました。全問正解でないと合格ではないというルール。そして全問正解者は音読に行かなくていいけれども、不合格者のミスが合計で二けたとなると田端大橋で音読をすることを告げました。そして不合格者は田端大橋へ。「田端大橋で読んで来い」というのも久々でした。ここ数年していなかったなあと思いながら、彼らはこちらの必死を感じたせいか誰も異議を唱える者はいませんでした。最近では中学生が講習時に田端大橋で記念写真を撮っていますが意味合いが違います。

「どんな気持ちがした?」「悔しかった」「恥ずかしかった」という声が出ました。「この悔しさを持ってほしかったのです。」「ここから始まる」そう感じました。

次の日、以前合格した二名が合格。残ったものはまた田端大橋へ。次の日、一名合格。「できない」と言っていた者も日を重ねるにつれて合格者が増えてきました。ミス一つに悔しさを表す姿が見えてきました。交換して移転をさせ、字が汚い、文字が読めない物はバツにしていいということも告げました。そうすると自分に厳しくするものが出でてきました。全問正解だったといわれてもしっかりと見直し、やはり違っていましたと自己申告をする者も出てきました。最大八十四のミスがあったFちゃんでしたが五回目で合格。

「やればできる」「できるまでやる」それを体験してほしかったのです。やる前から「できない」というのは誰が決めたんだ。そう自分が決めただけなんだ。「やればできる」今度は英頻の緑一冊をいつ通す。(一冊通してミス一けたが合格)そのために再度教えてほしいところの項目を訊きました。もう「できない、無理」という発言は出ませんでした。わからないところはやり直すしかありません。そうです。彼らに毎日、塾でしなければならない各教科の項目とチェック表を手渡しました。それを定期的に確認して進めていきます。

「さあ、ここから」